

英語語彙構造における 語の長さの意味との関連について

——iconicity の観点から——

松 本 純 一

この論考では、英語の語彙構造にみられるさまざまな興味深い現象のうちで、認知言語学の重要概念のひとつである iconicity という考え方をを用いて一般的な説明をおこなうことが可能であると思われるものを、いくつかとりあげてみることにしたい。

[1] iconicity の概念とその一般的定義

近年、理論言語学の世界に、新しい大きな波が押し寄せてきている。認知言語学と呼ばれる新しい分野の台頭がそれである。認知言語学は、従来の構造主義言語学や生成文法理論の限界を打破すべく、従来の多くの言語理論で当然のように前提とされてきた様々な観点にするどい批判を投げかけている⁽¹⁾。

認知言語学が提起している多くの興味深い考え方のうちのひとつに、言語における形式と意味との関係の重視、ということがある。従来の構造主義や生成文法では、形式と意味との対応関係を単なる恣意的・習慣的なものにすぎないとみなす傾向があった。これに対し認知言語学では、言語の形式と意味との間には、完全に法則的なものではないにしても、ある種の重要な動機づけ (motivation) が存在するものと考え、形式と意味との関連を様々な観点から追究している⁽²⁾。

これらの形式と意味の関連に関する諸概念のうち、とりわけ応用性の高いものとして着目すべきであると思われるものに、ここでとりあげる iconicity という概念がある。

iconicity (類似性, 類像性) の概念は、C.S. Peirce による記号の分類における icon という概念に端を発し、Jakobson によって本格的に言語学上の概念として取り入れられたものといえる。この点に関して、『新言語学辞典』(研究社) の 'icon' の項目から引用する。:

アイコンとは……意味するものと意味されるものとの類似性に基づくものである。

……Jakobson は、Peirce などを引用し、言語記号のアイコン的性格を強調しているが、

……

そしてこの辞典では、英語をはじめとする自然言語の語順や形態素などに関して、いくつかの実例が挙げられている研究として、Jakobson (1965) が紹介されている。

ここで注意しておかねばならないことは、Peirce が提案した記号学上の概念としての icon と、Jakobson 以後に言語学上の概念として取り入れられたそれとの間には、重要な相違があるということである。

Peirce が提案した icon とは、記号とその指示対象との間に類似性が存在する場合に成り立つ概念であるとされていた。ところが、Jakobson が言語記号の icon 的性質を主張した際には、icon とは（言語）記号とその意味内容（指示対象ではなく）との間の類似性をあらわす概念としてとらえなおされているのである。

このように icon という概念を当初よりも広く再解釈した結果として、その定義がやや曖昧で非明示的なものになってしまったという点は否めない。しかしまた、このような再解釈によって、iconicity というものが言語学上の概念として本格的に取り上げられ得る可能性が広がってきたのだともいえよう。現代の認知言語学で取り上げられている iconicity の概念は、もっぱらこの Jakobson 流の再解釈に基づくものであるといえる⁽³⁾。

上に述べた点とも関連して、iconicity の概念の明確な規定は、なかなか難しい問題をはらんでいると思われるが、本論ではごく大まかな定義をとることにして、次のように考えておくことにする。

ある言語形式が、何らかの形でその表す意味と恣意的とは思えない密接な関連を持っていると考えるとき、そのような性質を iconicity と呼ぶ。

ただし、ここでいう「言語形式」とは、抽象的な言語構造のようなものではなく、むしろ語順・語の長さ・特定の語の有無といったような、表面的で具体的なレベルのものをさすと思っていきたい。

上記の定義は、「言語形式とその意味との間の恣意的でない関係は、すべて iconicity によるものだと単純に結論づけてしまってよいのか」という批判を受ける可能性があるであろう。しかしながら、少なくとも Peirce による記号の三分法を基礎に置く限りは、概ねこの定義で充分である、と考えてよいものと思われる。

Peirce は、人間の扱う記号を、その意味作用の性質から三種類に分類している。指標 (index) [近接的關係による意味作用]・類像 (icon) [類似關係による意味作用]・象徴 (symbol) [恣意的・慣習的關係による意味作用] の三分法がそれである。これら三種の記号のうち、近接的關係による意味作用に基づく index という種類の記号は、ある種の比喩表現の分析や失語症の研究等においては重要な位置づけを与えられてはいるが、ある言語形式とその形式が表す意味との関係、といった点に関しては、特に重要な役割を果たしているとは言えない。したがって、少なくともこの三分法ですべての（言語）記号が分類しつくされているものと仮定する限りにおいては、言語記号の中で恣意的關係に基づかないものは、す

べて類似性に基づく記号 icon である、と定義してしまってもかまわないことになるのである。

以下では、このようなゆるやかな定義にそって、日頃我々が学習英文法などで目にしている、英語の語彙体系にかかわる言語現象のいくつかに対して、iconicity の観点から説明を加えてみようと思う⁽⁴⁾。

[2] 実例研究

(1) 形容詞の-ic 型と-ical 型

-ic と-ical は、英語の形容詞にごく普通に見られる語尾である。同一の形容詞が、-ic 型と-ical 型の両方の形を持つことも多く、そのような場合普通は両者の意味にはほとんど差がないことが多い。しかし、いくつかの形容詞に関しては、次にあげるように-ic 型と-ical 型とでかなりはっきりと異なった意味を表す傾向のあるものが存在している。

- ① economic (経済の)——economical (節約する)
- ② historic (歴史的な)——historical (歴史学上の)
- ③ classic (一流の)——classical (古典的な)
- ④ diabolic (悪魔のような)——diabolical (残忍な・邪悪な)

これらの各対においても、実際にはそれほど厳密に絶対的な使い分けが守られているとは限らないようであるが、典型的な傾向として上記のような区別があることは、事実として認めてよいと思われる。

さて、これらの対を検討して、-ic 型と-ical 型の意味の区別に関して、何か法則的なものがみとれるであろうか。

-ic 型の場合には、もともになっている名詞の意味に直接関連したような意味を持つ傾向が感じられ、-ical 型の場合には、-ic 型よりも比喩的・間接的な意味が与えられているような傾向がみとれるように思われる。これは、iconicity の原理によって、より語形の長い-ical 型のほうが、より比喩的・間接的な、いわば遠回しな意味を表すのにふさわしいと感じられているためであると説明することができる。classic——classical の対の場合には、形容詞の意味そのものは classic の方がむしろ抽象的で漠然とした意味であるが、もとの名詞である class (階級) という言葉の意味を直接反映しているのは、やはり classic の方である、ということに注意したい。

一旦、このような法則を結論づけてみるならば、普通辞書などでは意味の区別がないとされがちなものについても、-ic 型と-ical 型とでは微妙な差異が感じられるような例も思い浮かんでくる。(あくまで私の個人的な言語感覚にすぎぬ可能性もあることをおことわりして

おくが)。

例えば、「magic goods を売る店」というと、手品の道具などを売っている玩具店を想像するが、「magical goods を売る店」というと、占いの道具や、神秘的・魔的な飾り物などが売られている店、といったものが思い浮かぶのではないだろうか。ここでも、-ical 型の方に、より間接的・抽象的な意味が感じられやすいという傾向がみてとれそうである。

また、いささか通俗的な例ではあるが、アメリカや東京の Disneyland で夏の夜におこなわれる、電飾をほどこしたフロートによるパレードが、(広告的効果からいえば、できるだけ短く記憶に残りやすい語形を選んだほうが得策であるように思われるにもかかわらず)、electric parade ではなく electrical parade と呼ばれているのは、electric よりも electrical という語の方が「華麗な・目の覚めるような」といった比喩的な語感が伴いやすいためであると考えられる。

さらに、piratic と piratical という語の対についても、中小の辞書ではまったくの同義語として一括して扱われていることが多いが、OED をはじめとする大辞典の類を見ると、piratical の方は主として「海賊版の」という比喩的な意味で用いるということが明示されている。

しかしながら、これらの例とはまったく逆の傾向を示すものも存在することもまた事実である。例えば、politic (抜け目のない) と political (政治の) の対の場合などには、明らかに -ic 型の語の方が比喩的な意味を担っている。これまで、この現象を「法則」「原理」など強い言葉で表現してはきたが、やはり理科系学問などでいうそれとは厳密さや一般性においてかなりの相違があろう。それでも、認知言語学の知見に沿ってこのような傾向にあらためて着目することには十分な意義があると私には思われる⁽⁵⁾。

(2) -ly 型副詞が特殊な意味を持つ場合

英語では、形容詞に -ly をつけてそれに対応する副詞形をつくるという造語法が発達しているが、いくつかの日常的な語に関しては、-ly を持つ形と持たない形の両方に副詞としての働きがあり、両者がまったく異なる意味を持つという現象がみられる。以下のような例がそれである。

- ① close (近くに)——closely (親密に)
- ② high (高く)——highly (おおいに)
- ③ late (遅く)——lately (最近)
- ④ near (近くに)——nearly (ほとんど)
- ⑤ short (短く)——shortly (すぐに)

これらの例を検討していくと、前項(1)で述べたことときわめて類似した結論が、しかも前項の場合よりもずっと明確な形で現れてくることになる。すなわち、このように二種の副詞形が存在する場合には、-ly のついた形の語の方がいつも比喩的・抽象的な、特殊な意味を担う、というかたちで意味の分担がなされていることがわかるのである。ここでもまた「より長い語形の方がより遠回しな意味を持つ。」という iconicity の原理が働いていると考えることができる⁽⁶⁾。

(3) 特殊な意味を持つ複数形名詞

いくつかの名詞に関しては、複数形のかたちで用いた場合に、もとの単数形にはなかった特殊な意味が生じるといった現象がみられる。

- ① air (空気)——airs (気取り)
- ② arm (腕)——arms (武器)
- ③ force (力)——forces (軍隊)
- ④ good (善)——goods (商品)
- ⑤ letter (文字)——letters (文学)
- ⑥ manner (方法)——manners (作法)
- ⑦ measure (寸法・測定)——measures (手段)
- ⑧ pain (痛み)——pains (努力)
- ⑨ day (日)——days (時代)
- ⑩ sand (砂)——sands (砂漠)

などがその例である。(ただし、最後の二例⑨⑩については、英語では単なる複数として扱われているものに対して日本語ではたまたま異なる二通りの訳語をあてているにすぎない、という意見もあるかもしれない)。

さて、これらの特殊な複数形の例をながめてみると、やはりここでも前二項で発見したのと同様の原則があてはまりそうであることが感じられてくる。つまり、それぞれの単数形—複数形の対において、複数形だけに生じる特殊な意味というのは、もとの単数形の持つ意味に比べて、より比喩的であったり、より抽象的であったり、またはより特殊的であったりと、何らかの点でより「遠回しな」意味であると結論づけることができよう。ここでもまた、「長い語形ほど、より遠回しな意味をあらわす。」という、iconicity の原理に基づく傾向があらわれていると説明することが可能である。

名詞の複数形に関しては、そもそも複数形のほうが長い語形で表現されるということ自体、Jakobson によって iconicity の実例として指摘されているということもここで思い出してお

きたい。

(4) 類似した語形を持つ普通名詞と集合名詞の対

英語には、少なくとも日本語の訳語からすれば殆どまったく同義語であると言いたくなるような名詞の対が存在していることがよくある。そのような場合には、しばしばそれらの類似した意味の名詞は、普通名詞・集合名詞・物質名詞といったような、いわば文法的な扱いの点での相違を示すものとして相互に存在価値を保っている。

以下に示す例は、語形的にも極めて類似した名詞の対が、片方は普通名詞として用いられ、もう一方は集合名詞的に用いられているという例である。

- ① machine——machinery (機械)
- ② clothes——clothing (衣服)
- ③ scene——scenery (景色)
- ④ poem——poetry (詩)
- ⑤ bag——baggage (荷物)
- ⑥ pot——pottery (陶器)
- ⑦ jewel——jewelry (宝石)
- ⑧ peasant——peasantry (農民)

上記の諸例からもわかるように、このような共存の状態が存在している場合には常に、集合名詞としての扱いを受ける語の方が、普通名詞としての扱いを受ける語よりも、語形的に長い形をしていることがみてとれる。

集合名詞の持つ意味は、対応する普通名詞の意味に比べればより抽象的な意味であると表現することができるから、ここでもまた、より長い語形を持つ語のほうが、より間接的で抽象的な意味を持つという原則を結論づけることができることになる⁽⁷⁾。

(5) その他の名詞の例

上記(3)と(4)の項目にはあてはまらないが、同様な説明が可能な名詞の例として、さらに次のようなものが挙げられよう。

- ① fish (魚)——fishery (漁業・漁場)
- ② question (質問)——questionnaire (アンケート)
- ③ limit——limitation (限界)

①の例は、語形の上では上記(4)の項目で挙げた諸例に酷似しているが、普通名詞と物質名詞といったような密接な意味の関係にはなく、大きく異なる意味を持っている点の特異であ

る。また②の例は、questionnaire という語の意味のとりかたによっては、上記(4)の項目で扱うことも可能であるかもしれない。

③の対に関しては、日本語の訳語としてはいずれも「限界」となってしまうであろうが、limitation のほうは抽象的な能力・活動に関しての限界・制限といった場合に用いられる傾向が強い。やはり、長い語形のほうが抽象的な意味、あるいは特殊な意味を分担する傾向があるのである。

(6) その他の形容詞の例

先に(1)の項目で述べた、-ic 型と-ical 型の相違に関するもの以外の、形容詞の例をここに一括して挙げておきたい。

- ① kind—kindly (親切な)
- ② human (人間の)—humane (人間的な・慈悲深い)
- ③ urban (都市の)—urbane (都会風の・洗練された)
- ④ cute (かわいい・気のきいた)—acute (鋭い・激しい・深刻な)

①は、あくまでもkindlyという語の(副詞ではなく)形容詞としての用法を考えた場合である。両者は、いずれも「親切な」という意味になるが、kindはしばしば具体的な行為における親切さを含意するのに対して、kindly は性質・態度・外観などの点で親切そうである、といったことを含意する傾向がある。やはり、語形の長いほうが、いくぶん抽象的な意味を含みがちであるといえる。

②と③の例は語形の対立が(発音上は)語中の母音の長短のみに帰されるという、いささか微妙な例であるが、意味の対立のほうは、語形の長い語のほうが比喩的な意味をあらわすという傾向がかなり明確にみてとれる例である。

④のcuteとacuteは、現在では関連のある語であるとはみなし難いかもしれないが、語源的事実からいうと、前者は後者の短縮形として発展してきたものであることが知られている。結果として現在では、やはり語形の短いcuteのほうが、どちらかという具体的な意味を担うことになっているという点が着目される。

(7) 前置詞 beside と besides

これまで、形容詞・副詞・名詞に関して、iconicityの原理によって説明をつけることが可能であると思われる例をみてきた。他の品詞にも同様の例がないかと考えてゆくと、日本人の英語学習において誤りやすいものとして有名な、前置詞 beside と besides の使い分けが思い浮かんでくる。beside は「～のそばに」という具体的・直接的な意味をあらわし、be-

sides のほうは「～のほかに・～に加えて」といった、比喩的・抽象的な意味をあらわしている。ここでもまた、対立するふたつの語形が存在する場合には、より長い語形の方が比喩的・抽象的な意味をあらわす役割を担うことになっている。

(8) 動詞の例

さらに、動詞に関しても、少数ながら同様の説明原理が通用しそうなものが存在する。英語のごく日常的な基本動詞であるといえる rise と、それと語源を共にするもうひとつの動詞 arise の共存状態がその例である。rise の方は、「上昇する」あるいは「立ち上がる」といったような直接的・具体的な意味を基本として持っている。一方 arise の場合にはそのような意味で用いられることは比較的まれであり、むしろ「生じる、起こる、現れる」といったような、比喩的・抽象的な意味で用いられるのが普通である。ここでもまた、これまでの諸例と同様に、多少なりとも語形の長い語のほうが比喩的・抽象的な意味を担当するという分担の現象が観察されるのである。

さらに同様な説明が可能な例として、count (数える) と account (説明する・みなす) の対、及び set (置く) と settle (解決する) の対とを挙げることができる。私達は、日頃これらの語同志の意味を関連づけて考えることは少ないかもしれないが、それぞれの対の後者の語の意味は、前者の語の意味が比喩的に拡大されたものと解釈することができよう。

[3] 結論と考察

以上、実例の数としては決して十分に多数であるとはいえぬかもしれないが、英語における五種の品詞にわたって、共通した説明原理が適用できそうな例を検討してきたことになる。本論で提案してきた法則を一般的にまとめてみるならば、結局次のようになるろう：

ある類似したふたつの語形に、それぞれ異なる意味が対応しているような対立の状態においては、一般に、語形の短い語の方が直接的・具体的な意味を担い、語形の長い語の方が間接的・比喩的・抽象的な、遠回しな意味を担う傾向がある。

ここに述べた一般化において、長いほうの語形が担う「間接的・比喩的・抽象的な、遠回しな意味」という表現について、もう少し説明を試みておくべきであろう。

認知言語学の枠組みを利用して進めてきた議論に、それ以前の言語学の述語を無理にあてはめようとするのはむしろ危険なことかもしれないが、上記の一般化を、認知言語学以前から存在する意味論の一般的概念を用いてあえて表現し直すとするならば、次のように述べることもできるであろう：

長い語形のほうが、内包 (intension) の量が多い。

あるいは、

長い語形のほうが、意味素性 (semantic feature) の数が多い。

しかしながら、これらのいわば古典的な意味論上の概念を用いて、本論で検討してきたような諸例を説明しようとするのは、あまり有益なことでは私には思われぬ。なぜなら、これらの概念は、ある特定の言語形式（例えばある形態素やある特定の語など）に対して、ある特定の意味（それがどんな形で記述されるにせよ）が対応している、という前提にそって成り立っている概念であるからである。それに対して、本論で iconicity の名のもとに検討してきた諸現象は、語の長短という一般的な言語形態上の特徴に、意味の間接性・抽象性といったような一般的な意味的特性が結び付いている、という性質のものである。この点で、本論で述べてきた現象は、やはり本質的に内包や意味素性の概念とはなじまないものであると考えられる。

また、上に使用した二種の述語のうち、とりわけ意味素性という概念の方は、認知言語学の強い批判の対象となっている概念であるということもここに付記しておかねばなるまい⁽⁸⁾。

本論に挙げてきた諸例の根源に存在する本質的な心理学的・生物学的根拠がどのような種類のものであるのか、という問題は、広く言語学以外の諸分野の知見を借りて追及してゆかねばならない大きな問題であり、本論で単純に結論を出してしまえるような事柄ではないと思われる。しかしながら、ここで暫定的な私見を述べておくならば、より長い語形を発話したり書いたりすることによる肉体的・精神的負担が、我々の認知構造の中で意味の間接性・抽象性といった特性と何らかのかたちで対応づけられているものと考えることができよう。たとえば、語形の長さや意味の豊かさというふたつの特性が、われわれ人間の脳内の情報処理機構においては、必要となる計算量の多さといった点で類似した性質であるとみなされることになっているのかもしれない。

次に、本論で述べてきたような、iconicity に基づく原則が、従来の言語理論との関連においてどのように位置づけられるのか、という点に関して、私の考えを簡単に述べておきたい。

認知言語学は、従来の言語理論、とりわけ生成文法理論に対するアンチテーゼとして発展してきた傾向が強いため、ともすれば生成文法に対する否定的態度を過剰に示しがちなきらいがある。しかしながら、私はこの両者の関係を、一方を肯定すればもう一方を否定しなければならぬようなものとは考えていない。両者は、今後も互いに相補いながら発展してゆくことが可能であり、またそうすべきものであると考える⁽⁹⁾。

このような点に関しては、詳しくはまた別の機会に論じる予定であるが、本論で述べてきた iconicity に基づく原則について言うならば、この原則は、生成文法で提案されている諸規則や諸原則とはまったく異なる次元の一般原則であると考えたい。例えば、生成文法が解

明の主な目標にしている、いわゆる「言語知識」とは別の知識体系に属する、「言語使用に関する知識」の一部として捉えることも可能であろう⁽¹⁰⁾。本論の第一節において iconicity の概略的定義を提示した際、「ある言語形式が、何らかの形でその表す意味と恣意的とは思えない密接な関連を持っていると考えるとき」という、いささか曖昧な表現をあえてしておいたのは、このような解釈の可能性を暗示しておくためでもあった。

もとより、本論で検討してきた諸例は、英語史の観点からはまったく別の説明が与えうるものである可能性が強いことであろう。また、共時言語学の枠内でも、認知言語学以前からある様々な諸概念、特に有標/無標の概念などとの関連が、さらに追究されるべきであると思われる。しかしながら、今回この論考で提案した、iconicity の原理による法則も、このような現象に対するひとつの興味深い一般化として十分な検討に値するものといえよう⁽¹¹⁾。

とりわけ英語教育の現場などでは、従来何の説明もなされずに単なる個別的知識として与えられていたこれらの現象に対して、非常に簡潔で納得しやすい解説を与え、知識を定着させやすくする手段として、このような説明法はかなり有効であると思われる⁽¹²⁾。

いずれにしても、本論で扱ってきた iconicity という概念は、認知言語学の隆盛によってもたらされた諸概念のうちでも最も興味深いもののひとつであると私には思われ、今後とも追究してゆきたい分野であると感じている次第である。

注

- (1) 認知言語学の概要を把握なさりたい向きは、Lakoff(1987)、Langacker(1987)、Taylor(1989)等を参照されたい。
- (2) 本論でとりあげる iconicity という概念以外の観点から、現代英語の意味と形式の対応関係を追究した代表的研究としては、Lakoff(1987)における多義語の分析、Dixon(1991)における動詞の意味と語法の対応関係に関する研究等が挙げられよう。ただし、Dixonの場合は、認知言語学という立場を特に強く主張しているわけではない。
- (3) 記号とその指示対象との類似性という、本来の Peirce 流の定義による iconicity が自然言語に表れている実例としては、擬音語・擬態語の類や、音象徴と呼ばれている現象などが挙げられよう。ただし、音象徴については、そのような事実をどの程度自然言語の中に認めるべきか、という点に関して、人によってかなり大きな意見の相違があることは周知のとおりである。
- (4) iconicity の観点に基づく、これまでの実例研究の集大成としては、Haiman(ed.)(1985)が挙げられる。
- (5) ただし、ここで反例として示した politic と political の例に関しては、前者は policy の形容詞形であるのに対して、後者は politics の形容詞形であるという説明も成り立つ。それならば、この二語はもともとまったく異なる由来を持った語であるということになり、ここで述べていることの適切な反例とはならないということもできる。
- (6) 本節で述べた -ly 型副詞の意味に関する一般的傾向については、安藤(1985)、pp.89-90に同様の指摘がみられる。ただし安藤は、iconicity というような一般的な観点からこの現象を説明しようとはしていない。

- (7) ここに挙げた例の中には、集合名詞というよりもむしろ物質名詞として分類したほうがよいという意見が出るかもしれぬものもあるが、集合名詞も物質名詞も、ともに普通名詞よりも抽象的な意味を持つという点においては共通であるので、本論では両者の厳密な区別の問題にはあまり立ち入らぬことにした。
- (8) 「内包」や「意味素性」についての詳しい解説については、Leech (1981) [Chap.6], Lyons (1968) [Chap.10], Lyons (1977) [Chap.6, Chap9], Palmer (1981) [Chap.8] 等を参照されたい。
- (9) 認知言語学と生成文法理論の望ましい共存関係について、私は Matsumoto (1993) においていくつかの一般的提案をしている。
- (10) 「言語使用に関する知識」という表現は、現在では語用論 (pragmatics) と呼ばれる分野に属する現象をさして用いられることが多いが、ここで私が用いたこの表現はそのような狭い意味あいではなく、iconicity・文体的配慮・言い間違い等の現象をすべて含んだ、具体的・即時的な言語活動のレベルのことを広く意味している。
- (11) 事実、形態論の代表的な概説書、例えば Adams (1973), Bauer (1983), Spencer (1991) 等を繙いてみても、本論で述べてきたような観点からの語形成上の一般化といった発想は殆どみられない。
- (12) この点に関しては、残念ながら正式な実験の機会には恵まれていないが、私は以前約100名程の高校生に対して、本論に挙げた言語現象とその説明のいくつかをかみくだいて解説してみたところ、かなりの高評を得ることができたという体験がある。

引用・参考文献

- Adams, V. (1973). *An Introduction to Modern English Word-formation*. London: Longman.
- 安藤貞雄 (1985). 『続・英語教師の文法研究』東京：大修館書店。
- Bauer, L. (1983). *English Word-formation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Declerk, R. (1991). *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Dixon, R.M.W. (1991). *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford: Oxford University Press.
- Jakobson, R. (1965). "Quest for the essence of language". *Diogenes* 51, pp.21-37.
- Haiman, J. (ed.) (1985). *Iconicity in Syntax*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R.W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar, I*. Stanford: Stanford University Press.
- Leech, G. (1981²). *Semantics*. London: Penguin Books.
- Lyons, J. (1968). *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, J. (1977). *Semantics*. (Volume 1). Cambridge: Cambridge University Press.
- Matsumoto, J. (1993). "A preliminary for the new age of theoretical linguistics". *Colloquia* 14, pp.1-6.
- Palmer, F.R. (1981²). *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Spencer, A. (1991). *Morphological Theory*. Oxford: Basil Blackwell.
- Taylor, J.R. (1989). *Linguistic Categorization*. Oxford: Oxford University Press.
- 安井稔 (編) (1975²). 『新言語学辞典』東京：研究社。